

モンテーニュにおける認識と選択の メカニズムに関する一考察 —— 両極の一致・中間との対立 —— (1)

奥村 真理子

はじめに

『エッセー』第Ⅰ巻第54章「つまらぬ器用さについて」《Des vaines subtilitez》は、『エッセー』の中でも最も短い章の部類に属するが、軽妙さの中に鋭い批判精神が光る章である。ここでモンテーニュは、まず、「つまらぬ器用さ」（全編が同一文字で始まる詩句で詩を作る小細工や、粟粒を投げて針の穴に通す曲芸の類）で権力者の評価を得て出世しようとする者、「つまらぬ器用さ」を単に珍しさ、新しさ、難しさのゆえに評価する者を批判する。次いで、「両極が一致する事物」《choses qui se tiennent par les deux bouts extremes》（I, 54, p.311, a）¹⁾を誰が一番多く見つけられるかという遊びに皆と興じたことを語り、「両極が一致する事物」の例を列挙する。このようにしてモンテーニュは、自ら批判した、単に新奇と困難にしか価値のない「つまらぬ器用さ」を示す行為を行ない、『エッセー』の読者層の予想でこの章を結ぶ。すなわち、「普通の平凡な精神」にも「特別優秀な精神」にも気に入られず、かろうじて「その中間の地帯」《la moyenne region》（ibid., p.313, a）の精神の気に入るだろう、と、最後まで「両極が一致する」例で通すのである。だが、この読者層の予想の理由として、難しい仕事・珍しい問題と思えたことも一旦弾みが付けば実際にはそうではなく、類似の例が無数に見つかることが分かったことを述べることによって、「つまらぬ器用さ」の新奇・困難という表面的な価値をも無価値に帰してしまう。このように遊びの話の体裁を取りながら（これらの

事例のどこまでが実際に遊びの時に出てきた例で、どこからが『エッセー』執筆時にモンテーニュが見つけた例なのか判別しがたい書き方になっている）、モンテーニュは、曲芸・小細工の類の「器用さ」の「つまらなさ」——価値の無さ（vanité）——を自己の経験を具体例として語ることによって示すのである。

ところで、曲芸・小細工の類の「器用さ」の「つまらなさ」を示すためとはいえ、形式にこだわることを批判するモンテーニュが、この章の大半（上記の遊びの話の紹介以下終わりまで）を「両極が一致する事物」という形式で統一していることは興味深い。しかも、モンテーニュが加筆をしていく場合、必ずしも元の文章の主題には囚われず派生的主題を盛り込んだり膨らませたりすることも多いのだが、この章への加筆はすべてこの形式に従ったものである。また、内容的にも、この章の事例は「両極が一致する事物」の例という役割を果たすのみに止まらず、キリスト教徒の在り方、紳士観、無知に関する考察など彼の思想の支柱と言えるものを表現している。さらに、この形式に当てはまる表現は『エッセー』の他の箇所にも少なからず見られ、しばしば上記のようなモンテーニュにおいて重要な思想を表現しているのである。さて、スタロピンスキー氏は、モンテーニュが「三幅対」（《triade》、三つのものの組み合わせ）を好み、それがモンテーニュにとって、自己に割り当てられた立場・自己の与する立場を明確化・決定するのにしばしば役立っていることを指摘している²⁾。氏の挙げている「三幅対」の例を挙げれば、徳に関してモンテーニュは、常に苦痛や困難と戦う緊張感に満ちた徳と自然な習慣となった徳とを対立させた後、それらと自己の徳を比較しながら、自己の徳がそれらのいずれとも異なり、生来不徳から免れている邪気のなさ・善良さであることを述べていくのである。また、モンテーニュは哲学者を真理を「見つけた」と言う者、「見つからない」と言う者、「まだ探している」と言う者に三分類し（もっとも、この三分類はセクストゥス・エンペイリコスの『ピュロン主義の摘要』第一巻第一章にある）、始めに独断論と無知論を対立させた後、懐疑論を紹介しながら始めの二つに共通する誤り（一方は人間の「知」、他方は人間の「無知」について確信する自

惚)を批判して第三の懐疑論に与しているのである。スタロピンスキー氏のこの考察は、モンテーニュの認識と選択のメカニズムの一端を明らかにするものであると思われる。すなわち、上記の徳の「三幅対」はモンテーニュの「徳」に関する認識の仕方、モンテーニュ自身の「徳」（善良さ）の認識の過程を表しており、哲学に関する「三幅対」は、たとえ出発点の三分類は先人からの借用であれ、モンテーニュが与する説の選択の仕方を表しているから、モンテーニュが認識と選択を行なう際のこのような「三幅対」の機能の仕方は、メカニズムとみなすことができるのではないだろうか。スタロピンスキー氏は第I巻第54章に関して何も言及していないが、上に紹介したこの章の最後の例にも見られるように、この章でモンテーニュが扱っている「両極の一致」は同時に「両極の中間との対立」であり、二つの「極端」と「中間」という三項目から成っているのでこれもまた三幅対の一種である。しかも上記の「徳」と「哲学」の例にも見られるように、スタロピンスキー氏が挙げた「三幅対」において、しばしば相対立するものでありながらある面で一致する二つのものに第三のものが対立しているという点でも、「両極の一致・中間との対立」はこれと共通しているのである。したがって、『エッセー』において「両極の一致・中間との対立」という形で表されている文章を考察することによって、モンテーニュの認識と選択のメカニズムの一端を探ることができるのではないか。

I、「両極の一致・中間との対立」の単位要素

まず、「両極が一致する事物」という枠がモンテーニュの判断のメカニズムの重要な単位要素を含んでいることを、「つまらぬ器用さについて」の前半の事例に即して見ていこう。便宜上、各事例に通し番号(①...)を打っておく。(以下①等はすべて第I巻第54章における事例の通し番号)

①Sire, c'est un tiltre qui se donne à la plus eslevée personne de nostre estat, qui est le Roy, et se donne aussi au vulgaire, comme aux marchans, et ne touche point ceux d'entre deux. ②Les femmes de

qualité, on les nomme Dames ; les moyennes, Damoiselles ; et Dames encore, celles de la plus basse marche.

(b) ③Les dez qu'on estend sur les tables, ne sont permis qu'aux maisons des princes et aux tavernes.

(a) ④Democritus disoit que les dieux et les bestes avoient les sentimens plus aiguz que les hommes, qui sont au moyen estage. ⑤Les Romains portoient mesme accoutrement les jours de deuil et les jours de feste. ⑥Il est certain que la peur extreme et l'extreme ardeur de courage troublent également le ventre et le laschent.

(c) ⑦Le saubriquet de Tremblant, duquel le XII Roy de Navarre, Sancho, fut surnommé, apprend que la hardiesse aussi bien que la peur font tremousser nos membres. Et celuy à qui ses gens qui l'armoient, voïant frissonner la peau, s'essayoyent de le rassurer en apétissant le hasard auquel il s'alloit presanter, leur dict : Vous me connoissez mal. Si ma chair sçavoit où mon courage la portera tantost, elle s'en transiroit tout à plat.

(a) ⑧La foiblesse qui nous vient de froideur et desgoutement aux exercices de Venus, elle nous vient aussi d'un appetit trop vehement et d'une chaleur desreglée. ⑨L'extreme froideur et l'extreme chaleur cuisent et rotissent. ⑩Aristote dict que les cueus de plomb se fondent et coulent de froid et de la rigueur de l'hyver, comme d'une chaleur vehemente. (c) ⑪Le desir et la satieté remplissent de douleur les sieges au dessus et au dessous de la volupté. (ibid., pp.311-312)

1、一般的前提・理屈とそれに反する事例の対立

「両極が一致する事物」を探すこの遊びの前提となっているものは、事物の両極端をなす二つのものは正反対であるはずだ、という一般的な考え方・理屈である。この前提を覆すところにこの遊びの面白さがある。この章の各事例に

は次のように前提を補足することができよう。階級制社会では最も高い身分と最も低い身分は一方は尊称、他方は蔑称という正反対の呼び方をされるはずであろう。ところが、どちらも男性は《Sire》、女性は《Dame》と呼ばれ、これらは中間の階級の人々には用いられない（①、②）。国民の衣食にまで贅沢を禁止する勅令が發布されているのに（モンテーニュは第Ⅰ巻第43章で当時幾度も發布されていた奢侈取り締まり令を批判している）、中間の階級では用いることを許されていないテーブルクロスが王侯の宮殿と居酒屋にのみ許されている（③）。人間は神と動物の中間に位置するものであると言われている以上、その能力はそれらの中間を占めるはずであるのに、デモクリトスは神と動物が人間より鋭い感覚を持つと言っていた（④）。喪中と祭日は、一方は哀しみの日、他方は喜びの日であるのに、ローマ人は同じ服装をした（⑤）…このように一般的な考え方・理屈とそれに反する例を対置することをモンテーニュは好んで行なう。たとえば、第Ⅰ巻第1章「人は様々な方法で同じ結果に達する」は、敵の復讐心を和らげるために降伏して憐憫の情に訴えるという普通一般の方法と、逆に不屈の勇気を示して同じ結果を得ることがあるという実例の対置で始まる。また、第Ⅰ巻第25章「術学について」は、多くの学問・知識を持つ先生たちがなぜ世間で尊敬されるどころか馬鹿者扱いされるのか、なぜ必ずしも賢者ではないのか、という疑問で始まっている。一般的な前提や理屈とそれを裏切る事例の対立がモンテーニュの興味を引き付け、彼に物事を考える切っ掛けを与え、既成の枠に囚われない自由な考察を可能にするのである。事例①～③、⑤は社会的慣習の非合理性、非整合性を露にしているが、社会的慣習の非合理性、非整合性は、第Ⅰ巻第23章「習慣について、あるいは一旦認められた法律を安易に変えてはならないこと」において重要な役割を演ずる要素の一つである。すなわち、モンテーニュは、不合理な事柄にも人々を馴らしてしまう力が習慣および慣習の本質であり、存在理由であるから、不合理であるからといって、一旦社会に定着した慣習や法律を国民に混乱と動揺を招き国を危機に陥れてまで変更する正当な理由とは考え難い、と判断するのである。また、モンテーニュは事例④のデモクリトスの言葉を、自己の能力を自負するあまり

傲慢になっている人間に人間の愚かさや空しさを示す「レーモン・スボン弁護」でも引用し、人間の感覚の不確実さを論じるのである（II, 12, p.597, a）。

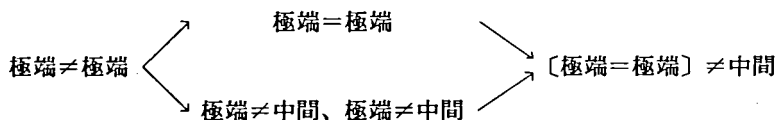
2、差異の認識、「極端」に対する敏感さ

「両極が一致する事物」の例には、一般的な前提や理屈とそれを覆す事例の対立への興味とともに、事物の程度の違いに対するモンテーニュの敏感さが表れている。極度の恐怖も極度の勇猛心も同じく下痢を引き起こす（⑥）。「極度の」《extreme》という形容詞が使用されているのは、「両極が一致する事物」《choses qui se tiennent par les deux bouts *extremes*》という枠に当てはまる例を集めている以上当然であろうが、この遊びの話を『エッセー』の中に盛り込んでいるという事実から、この枠がモンテーニュを引きつけたのではないかという推測は容易に成り立つ。モンテーニュには「極端」に敏感で強い興味を示す傾向があり、だからこそ彼に特徴的な、中庸を常に保とうとする叡知が生まれると言えよう。また、《Distingo》「私は弁別する」を判断の基本としているモンテーニュは（II, 1, p.335, b）、同じ名を与えられている事物・概念にも様々な様相と差異を認め、しばしば極端な場合と普通の場合に弁別する。ここでの例が恐怖・勇猛心という感情に関わるものなので、感情に関する例を挙げよう。第I巻第2章「悲しみについて」でモンテーニュは、悲しみ、恋情、享楽、喜び、羞恥といった感情が極度に激しい時の人間の例を集め、ある感情が極まると、その感情が普通の程度の場合にもたらす状態とは著しく異なる状態に人間を至らしめることを認め、「極端」と「普通」を弁別している。これは同時に、人間の外見に現れた様子だけでその人の内心を容易に推定することはできないという認識に繋がる。これもまた、モンテーニュにおいて重要な認識である。武者震いしている王を見て恐怖で震えていると思いを違えた家来の例⑦はこれに当てはまる。このように、同じ名称を持つ事物・概念に差異を認識し弁別することで、モンテーニュは安易な一般論や単純な公式化（例えば、「震えている」ならば「恐れている」といった「AならばBである」という公式化）を免れるのである。

3、対立と一致

1でわれわれが述べた一般的前提・理屈とそれを裏切る事例の対立には「対比」が機能しており、2の差異の認識、「極端」に対する敏感さには「弁別」が機能していると言えよう。「弁別」と「対比」は、モンテーニュの探究・思索のもっとも根本にある要素である。³⁾類似よりも差異によってより一層活気づくモンテーニュの思考は対立する事物に強い関心を寄せ、それらを対比する。「両極」は対立関係の極めて著しい二つの事物としてモンテーニュの興味を引きつけ、考察の対象となる。恐怖と勇猛（⑥、⑦）、冷淡・嫌気と放埒な情熱・激しい欲求（⑧）、飽満と欲望（⑩）…対比する事物のコントラストが強いほど各々の性質を明確にできよう。だが、モンテーニュはそれらを対立関係においてのみ捉えるに止まらない。視点を変えてそれらの共通点・一致をも見出す自由な目、柔軟性を持っているのである。「つまらぬ器用さについて」にもそれが端的に表れている。この点で、アリストテレスの「倫理的徳」の定義における両極と中間の定義とモンテーニュの両極と中間の捉え方は対照的である。アリストテレスは徳を「中」すなわち中庸、悪徳を両極端と定義し、それらの対立関係を次のように述べている。「最大の反対対立は、両極の『中』に対するそれよりも、両極相互の間におけるそれである。両極相互の隔たりは『中』からの隔たり以上に大きいのであるから。（…）いずれか一方の極において『中』に対する若干の類似性が見られる場合があるが（…）、両極相互の間にあっては最大の非類似性が見られる。しかるに、相互に最も多く隔たっているものが相互反動的なものとして定義されるのである。かくして、より多くを隔てているものは、より多く互いに反対の性質を有している。⁴⁾」このような前提に基づいてアリストテレスは各々の「倫理的徳」を体系的に論じていくのであるが、このように論理的整合性を首尾一貫して保ち体系的に事物を分類・定義しようとする態度はモンテーニュにはない。モンテーニュにとっては「最大の非類似性」を持つ「両極」も別の面から見れば何らかの点で一致し、類似性をもつのである。もちろん、われわれはアリストテレスとモンテーニュの優劣

を述べようとしているのではなく、モンテーニュの非体系性を浮き彫りにしているのである。ただ、「両極が一致する事物」を探す遊びには、アリストテレスの「両極の最大の非類似性」に反するものを見つける面白さがあつたのかもしれない。モンテーニュは事例⑩でアリストテレスに言及しており、『エッセー』には上記の「両極の最大の非類似性」を述べた『ニコマコス倫理学』からの引用が他にもあり、⁶⁾16世紀におけるアリストテレス哲学の普及を考えれば、モンテーニュが「両極の最大の非類似性」を少なくとも他の著者を通して間接的に知っていたことは想像に難くない。さらに、モンテーニュは『エッセー』の他の箇所でも「論理的・アリストテレス的な論の立て方は私には無用だ」と言っているように、⁷⁾アリストテレスに対ししばしば批判的な態度を示しているのである。恐怖と勇猛はたしかに対立する感情であるが、いずれも極端な場合には下痢を引き起こすという点で一致しており（⑥）、また、体を震えさせるという点で一致している（⑦）。冷淡・嫌気と放埒な情熱・激しい欲求は同じく陰萎の原因となる（⑧）。飽満と欲望は快楽に対しむしろ苦痛をもたらす（⑩）。この事例⑩にも見られるように、モンテーニュは一致を見出した両極を中間との対立関係に置く。あるいは、中間と対立関係に置くことによって両極の一致を見出す。欲望と飽満という両極の一致点である苦痛には、快楽の享受が中間として対立している。事例⑥～⑧は中間に言及していないが、それぞれ、平静さ（⑥・⑦）、程よい欲求（⑧）という中間が、下痢をしないこと、体が震えないこと、陰萎に陥らないことという点で両極と対立関係に置かれていることは容易に理解できる。このような「両極の一致・中間との対立」の認識の過程を図式化すれば次のようになる。＝は一致、≠は対立を表す。



II、〔極端=極端〕>中間

「〔極端=極端〕≠中間」には二つの場合が考えられる。両極が中間より下位にあるものとして認識される場合「〔極端=極端〕<中間」(仮に△型と呼ぶ)と両極が中間より上位にあるものとして認識される場合「〔極端=極端〕>中間」(▽型)である。



例えばアリストテレスの徳(中庸)と悪徳(両極)の関係は、両極が「最大の新類似性」を持つとしても「悪徳」という範疇に属するという点で一致すると考えるならば、△型であると言えよう。モンテーニュにおける「両極の一致・中間との対立」には両者とも見られるが、まず、「つまらぬ器用さについて」の後半の例のほとんどがそうである▽型の場合を、他の箇所に見られる例も含めて考察しよう。

1、人間相互の差異、精神の段階の両極と中間

モンテーニュは人間相互の差異に大きな関心を示す。彼が重視する人間相互の差異は社会的地位・名声・財産ではなく、「内部的」《interne》、「本質的」《essentiel》と彼が呼ぶ身体および精神の差異である(I, 42, pp.258-261)。特に精神の差異に関してモンテーニュは、「地上から天までの隔たりと同じくらい無数」の段階を認めている(I, 42, p.258)。▽型の大部分は人間の精神の無数の段階の両極とそれらの中間を弁別・対比するものであることを、まず、モンテーニュが人間の精神の所産のうち特に尊び愛好する詩と歴史に対する彼の評価の仕方に見てみよう。

モンテーニュは詩を愛好し尊び、詩を見る目には相当自信を持っている。子供の頃から詩に魅了されていたと言うモンテーニュは、詩の好みが三種類に変遷したが、好きになった詩はいずれもその種類で最高のものだと言っている(I,

37, p.232, c)。他方、民衆や新大陸の食人種の詩歌にも、偏見のない理解を示し、芸術的完璧さに匹敵する価値を見出している (I, 25, p.137, c; I, 31, p.213, a)。だが、凡庸な詩に対してはかなり辛辣で、「へぼ詩人」の印刷屋への出入りを禁じてくれると有り難いとさえ言うほどである。しかし、詩作に関しては「子供同然」だから、詩では馬鹿は許されないから、しないと言う (II, 17, p. 635, a)。詩を尊ぶがゆえに凡庸な詩を許容しない厳しい批判の目を自己にも向けるからである。「つまらぬ器用さについて」における事例^⑬は、モンテーニュが尊ぶ精神の産物である詩に関する彼のこのような認識を簡潔に表現している。

⑬ *La poésie populaire et purement naturelle a des naïveté et graces par où elle se compare à la principal beauté de la poésie parfaite selon l'art ; comme il se void és villanelles de Gascongne et aux chansons qu' on nous rapporte des nations qui n' ont cognoissance d' aucune science, ny mesme d' esriture. La poésie mediocre qui s'arreste entre deux, est desdaignée, sans honneur et sans prix.* (I, 54, p.313, c)

この文章は次のように図式化することができよう。

両極：民衆の純粹に自然な詩	芸術的に完璧な詩	：	評価
(素朴・優雅)	(最上の美しさ)		
中間：	凡庸な詩	：	批判

この図式に従って言えば、モンテーニュは「純粹に自然な詩」も「芸術的に完璧な詩」も作ることができず、それらの中間の「軽蔑され、榮譽も価値もない凡庸な詩」しか作れないから敢えて詩作をしないのである。

モンテーニュは詩において、技巧・芸術の完璧さか、あるいはそれのまったくない自然さ・素朴さを評価し、それらの中間の凡庸さ・中途半端を厳しく批

判しているが、このような認識は、モンテニユが「読書について」の章で歴史家について述べる文章にも表れており、われわれはここにも「両極の一致・中間との対立」を見出すことができる。

J'ayme les Historiens ou *fort simples* ou *excellens*. *Les simples*, qui n'ont point dequoy y mesler quelque chose du leur, et qui n'y apportent que le soin et la diligence de r'amasser tout ce qui vient à leur notice, et d'enregistrer à la bonne foy toutes choses sans chois et sans triage, nous laissent le jugement entier pour la cognoissance de la verité. Tel est entre autres, pour exemple, le bon Froissard, qui a marché en son entreprise d'une si franche naïfveté, qu'ayant faict une faute il ne creint aucunement de la reconnoistre et corriger en l'endroit où il en a esté adverty ; et qui nous represente la diversité mesme des bruits qui couroyent et les differens rapports qu'on luy faisoit. C'est la matiere de l'Histoire, nue et informe ; chacun en peut faire son profit autant qu'il a d'entendement. *Les bien excellens* ont la suffisance de choisir ce qui est digne d'estre sçeu, peuvent trier de deux raports celuy qui est plus vray-semblable ; de la condition des Princes et de leurs humeurs, ils en concluent les conseils et leur attribuent les paroles convenables. Ils ont raison de prendre l'autorité de regler nostre creance à la leur ; mais certes cela n'appartient à guieres de gens. *Ceux d'entredeux* (qui est la plus commune façon), *ceux là nous gasterent tout* : ils veulent nous mascher les morceaux ; ils se donnent loy de juger, et par consequent d'incliner l'Histoire à leur fantasie : car, depuis que le jugement pend d'un costé, on ne se peut garder de contourner et tordre la narration à ce biais. Ils entreprennent de choisir les choses dignes d'estre sçeuës, et nous cachent souvent telle parole, telle action privée, qui nous instrueroit mieux ; obmetent, pour choses incroyables,

celles qu'ils n'entendent pas, et peut estre encore telle chose, pour ne la sçavoir dire en bon Latin ou François. Qu'ils estalent hardiment leur eloquence et leurs discours, qu'ils jugent à leur poste; mais qu'ils nous laissent aussi dequoy juger apres eux, et qu'ils n'alterent ny dispensent, par leurs racourcimens et par leur choix, rien sur le corps de la matiere, ains qu'il nous la r'envoyent pure et entiere en toutes ses dimentions. (II, 10, p.417, a)

彼が好む歴史家は、史実に解釈や判断を加えて取捨選択することなく、ひたすら史実に忠実に記す「きわめて単純な歴史家」か、史実の重要性、信憑性を適切に判断して取捨選択し、歴史上の人物の意図を推論してそれを適切な言葉で表現することのできる「きわめて優れた歴史家」である。だが、後者の能力をモンテーニュは僅かの人々にしか認めない。他方、史実の重要性、信憑性を適切に判断する能力がないのに取捨選択をし、自己の解釈を無理に正当化するために史実の歪曲さえ行なう「中間の歴史家」を、モンテーニュは「すべてを台無しにする」者とみなし厳しく批判するのである。⁸⁾ 中途半端な凡庸な詩人に対するのと同様、史実を損なう中途半端な能力の歴史家に対しても、モンテーニュは相当厳しく批判しているのである。以上のようなモンテーニュの歴史家に関する認識には、次のような図式を見出すことができる。

両極：きわめて単純な歴史家	きわめて優秀な歴史家：評価
中間：	中間の歴史家：批判

ではモンテーニュ自身はどうだろうか。『エッセー』の中に引用している事例に関し、「いかなる史家よりも史実に忠実」で、「イオタひとつも偽造しない」と言い、信じ難いような話でも、その真偽に関してはそれを話した人、書いた人の良心に任せている (I, 21, pp.105-106, a, c)。事実に対し推論・解釈は自由に行なっているが、上に引用した文中で、誤った解釈を行なっても史実

を取捨選択・歪曲せず読者に判断の材料をそのまま与えているフロワサルを単純な歴史家の例として挙げているから、モンテーニュは単純な歴史家と同じ立場を取っていると見えよう。

以上の詩と歴史家に関する「両極の一致・中間との対立」から、次のことが共通項として注目に値する。第一は、モンテーニュが学芸という人間の精神の段階における、無学な民衆や食人種の詩歌、史実を重要性・信憑性の判断によって取捨選択することなくひたすら記録する歴史家という、自然・単純素朴の極致に、芸術的に完璧な詩、史実に適切な判断を下すことのできる歴史家という学芸の極致に匹敵する価値を認め、評価している点である。第二は、モンテーニュが、それらの中間の中途半端な学芸をむしろ自然・単純素朴より劣るもの・有害なものとして批判している点である。▽型の特徴として、以上の二点をまぎとらせることができる。

2、自己の遙か上と下

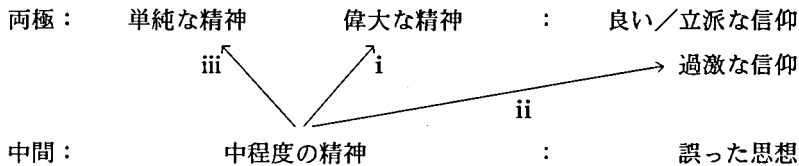
このようにモンテーニュが人間を精神の段階によって弁別・対比し、その両極端と中間を一致および対立関係に置くことは、決して単なる図式主義による人間の分類や定義を目指すものではない。それは、モンテーニュが、できるかぎり多くの視点から様々に異なる人間についての判断を行ない、自己を認識し、自己の生き方を判断・選択しようとする過程において生じる一メカニズムなのである。われわれは、本節2および3において信仰と不幸という宗教戦争という名の内乱の時代に生きたモンテーニュに切実に関わる問題に関する「両極の一致・中間との対立」という図式を持つ文章を考察しながら、彼が自己の遙か上と下という位置関係のイメージを媒介に相対的に人間および自己を認識し、生き方の選択を行なう姿を見ていくことにしよう。

宗教戦争の時代に生きたモンテーニュは、キリスト教徒としての信仰の在り方を「つまらぬ器用さについて」の事例⑩において次のように「両極」と「中間」に弁別している。（引用文中の（i）、（ii）は引用者）

⑩*Des esprits simples, moins curieux et moins instruits*, il s'en faict de bons Chrestiens qui, par reverence et obeissance, croient simplement et se maintiennent sous les loix. En la *moyenne vigueur des esprits et moyenne capacité* s'engendre l'erreur des opinions : ils suyvent l'apparence du premier sens, et ont quelque tiltre d'interpreter à simplicité et bestise, de nous voir arrester en l'ancien train, regardant à nous qui n'y sommes pas instruits par estude. *Les grands esprits, plus rassis et clairvoians*, font un autre genre de bien croyans ; lesquels, par longue et religieuse investigation, penetrent une plus profonde et abstruse lumiere és escriptures, et sentent le misterieux et divin secret de nostre police Ecclesiastique. (i) Pourtant en voyons nous aucuns estre arrivez à ce dernier estage par le second, avec merueilleux fruit et confirmation, comme à l'extreme limite de la Chrestienne intelligence, et jouyr de leur victoire avec consolation, action de graces, reformation de meurs et grande modestie. (ii) Et en ce rang n'entens-je pas loger ces autres qui, pour se purger du soubçon de leur erreur passé et pour nous asseurer d'eux, se rendent extremes, indiscrets et injustes à la conduite de nostre cause, et la taschent d'infinis reproches de violence. (I, 54, pp.312-313, b)

これとほぼ同じ趣旨の文章が「祈りについて」にある。モンテーニュは聖書の研究を「神様に召されてそこに身を捧げた人々」《*personnes qui y sont vouées, que Dieu y appelle*》にのみ許されるものとし、それ以外の人々にとっては「思い上がりと向こう見ずを育てる空虚な知識」《*science verbale et vaine, nourrice de presumption et de temerité*》よりも「純粋な全てを他人に任せきった無知」《*ignorance pure et remise toute en autruy*》のほうがはるかに有益で賢明としている (I, 56, p.321, c)。これら二つの文章のいずれにおいてもモンテーニュは、敬虔さと知性の両面できわめて優れた偉大な精神の

人々にのみ神学が許されるものであるという認識から、敬虔さに欠ける者・能力の足りない者が聖書や教義を解釈することを批判し、むしろ神学の知識は無くとも単純素朴に信仰する良き信者を偉大な信者に匹敵させている。このような認識に基づく選択として、モンテーニュ自身は単純素朴な信者の立場を取っている。これは事例⑬で、《En la moyenne vigueur des esprits et moyenne capacité s'engendre l'erreur des opinions : ils suivent l'apparence du premier sens, et ont quelque tiltre d'interpreter à simplicité et bestise, de nous voir arrester en l'ancien train, regardant à nous qui n'y sommes pas instruits par estude》と、神学の知識を持たず素朴に教義に従う者を「われわれ」と呼んでいることから明らかである。だが、モンテーニュ自身、かつては中間の段階にいたことがあるのだ。モンテーニュは無意味、おかしいと自分で判断して従っていなかった教義に堅固な根拠があることを教えられたことがある、という自己の経験を、カトリックの教義の取捨選択・新教徒に対する部分的譲歩を行なうことの危険性の論拠として語っているからである (I, 27, p.182, a)。したがって事例⑬に即して言えば、モンテーニュは教義を解釈する中間の段階を経て、偉大な精神の立派な信仰へと向かう i の道も、誤った思想を抱いたという過去の過ちを一掃し信用を回復するために過激・狂信的に教義を実践しかえって教義を汚す ii の道も取らず、事例⑬には記されていないが単純素朴な教義の遵守への道を選んだのである。この第三の道 (iii) を補って事例⑬を図式化すれば、次のようになる。



このように、キリスト教徒に関する認識の場合も詩および歴史家の場合と同様、モンテーニュが評価するのは単純素朴と極度の優秀さである。しかもモン

テーニュは後者を稀な特別な人にしか認めない。非難の対象となるのは、それらの中間の者、すなわち先程引用した「祈りについて」の中の言葉を用いれば、中途半端な能力の者の「思い上がりと向こう見ず」である。さらに、歴史家の場合とキリスト教徒の場合について言えば、勝手な取捨選択、誤った解釈、それを正当化するための強引さを批判する点が酷似している。偉大な精神の境地に達しない者がそれを自覚せず、自己の能力に自惚れ、傲慢にも自説に固執することにおける有害性・危険性を、モンテーニュが強く認識していることに注目しよう。モンテーニュは、自己の下に在る者を見て自惚れている者に自己の上を見て傲慢さを捨て謙虚さを取り戻すよう勧告している（II, 6, p.380, c）。モンテーニュは自己の上に在る者を進んで認識することによって自惚れを免れ、しかも自己の下に在る者を見下すどころか偏見のない目で見、その良さを積極的に認識することによって、中間の段階に属する者が陥りがちな有害・危険な在り方ではなく、「有益で賢明」な在り方として単純素朴な者を見倣うのである。

このようなメカニズムは、不幸に関する「両極の一致・中間との対立」において、モンテーニュ自身の生き方に深く関わるものとして機能している。

⑫ *La bestise et la sagesse se rencontrent en mesme point de sentiment et de resolution à la souffrance des accidens humains : les Sages gourmandent et commandent le mal, et les autres l'ignorent : ceux-cy sont, par maniere de dire, au deçà des accidens, les autres au delà ; lesquels, apres en avoir bien poisé et consideré les qualitez, les avoir mesurez et jugez tels qu'ils sont, s'eslancent au-dessus par la force d'un vigoureux courage : ils les desdaignent et foulent aux pieds, ayant une ame forte et solide, contre laquelle les traicts de la fortune venant à donner, il est force qu'ils rejalisent et s'émousent, trouvant un corps dans lequel ils ne peuvent faire impression : l'ordinaire et moyenne condition des hommes loge entre ces deux extremitez, qui est de ceux qui*

apperçoivent les maux, les sentent, et ne les peuvent supporter. (I, 54, p.312, a)

モンテーニュは人間の精神の段階の両極端、蒙昧と賢明の不幸に対する感じ方・不屈における一致を見出している。蒙昧な者は不幸に気づかないから動揺することもなければ、打ちめされることもない。賢者は不幸をあるがままに判断し蔑視することができるため、いわゆる不幸な事態に見舞われていることを自覚しても動揺せず、これに屈しない。すなわち、前者は無自覚、後者は不動心という違いはあるものの、両者とも結果的には平静・不屈という点で一致するのである。ところが、これらの中間にある普通の中位の精神は不幸を認めるが、賢者のようにこれを蔑視し耐える能力がないため動揺し打ちめされてしまうという点で、上記の両極との対立関係にあるとモンテーニュは認識しているのである。これを図式化すれば次のようになる。

両極	:	蒙昧	賢者	:	平静・不屈(幸福)
中間	:	普通・中位	:	動揺・屈伏(不幸)	

これら三者のうち、モンテーニュは何れに属しているのか。この文章だけでは断定できないが、第I巻第14章「幸・不幸の味は大部分われわれの考え方によること」や同巻第20章「哲学することとは死ぬことを学ぶこと」など、彼が心の平安を得る方法を模索する姿が『エッセー』の随所に見られ、また、われわれが3で引用する『エッセー』の他の箇所のことと同じ「〔蒙昧＝賢明〕>普通」という図式に基づく文章でモンテーニュは自己を「普通」に置いているから、中間の層に属していると自覚していたと考えてよいだろう。さて、この図式には蒙昧と賢明という人間の精神の段階の両極端に一致を認める柔軟性と同時に、自己と異なる精神を進んで認識し評価するモンテーニュの相対性を備えた認識の在り方が表れている。モンテーニュは、自分の尺度でのみ他人を判断して誤った評価を下すこと、自己の在り方を人間の雛形、基準として他の在り方を欺瞞・

不自然なものと判断することを「野蛮な愚かさ」と厳しく批判する。モンテーニュはそれとは逆に、自己より遙か上にある精神《fort loing au-dessus de moy》も極めて低い精神《l' extreme bassesse des esprits》も進んで認めるばかりか、それらを他者に認識するに止まらずそれらの萌芽を自己の内に認識することさえできるのである（II, 32, p.725, a, c）。すなわち、事例⑫に即して言えば、自己にとって不可能なことあり得ないことだからと言って、いかなる災難に遇っても動揺しない賢者の平静さ・不屈を、本当は動揺しているのに平静さを装っているだけだと判断したり、逆に、不幸に気づかない蒙昧な者を、人間本来の感受性に欠ける不自然な野蛮な存在と見做すことは「野蛮な愚かさ」であろう。モンテーニュは、「普通の中位の精神」《l' ordinaire et moyenne condition des hommes》の人間で、「野蛮」で「愚か」な判断をする者ならば「欺瞞・不自然」と見做して人間精神の埒外に置いてしまう賢明さと蒙昧さを、《deux extremittez》（⑫）、《fort loing au-dessus de moy》、《l' extreme bassesse des esprits》と、人間精神の両極として認識して人間精神の枠内に入れ、正当に評価するのである。今し方引用したこれらの言葉や《au deçà des accidens, les autres au delà》（⑫）のような位置関係を表す比喩は、チポーデの《Les images de Montaigne》にあるように⁹⁾運動の比喩と結合することによってモンテーニュに特徴的な比喩を成しているが、「両極と中間」を意識する文章に頻出する。《deux bouts extremes》；《au-dessus》、《au-dessous》（⑪）；《au-deçà》、《au-delà》（⑫）；《la moyenne region》（⑬）。すなわちモンテーニュは、位置関係のイマージュによって人間の様々に異なる在り方および自己の在り方を相対的に認識しており、「両極とそれらの中間」はそのような相対的な認識を簡略に表しているのである。これが、モンテーニュが自己の判断の根本的方針とする《Distingo》（できるかぎり個々別々に判断すること）を妨げるものではなく、無数の弁別を内包していることは、キリスト教徒の両極と中間において彼が中間をさらに弁別しているとおりでである。このような相対的な人間および自己の認識に基づいて、モンテーニュは賢明で有益な在り方を選択しようとする。▽型の「両極の一致・中間との対立」では、歴史家およ

びキリスト教徒の場合のように多くは単純素朴という、言わば学術・教養の最下層に置かれる在り方をモンテニユは選択する。既に述べたとおり、モンテニユは中途半端な能力の者が自己の能力以上のことをしようとするに、思い上がりと同様に見ず、危険と有害を見出すからである。このように人間の精神の無数の段階、自己と異なる位置に在る他者を認識し、自己と対比することによって、モンテニユは自己を認識し、自己に相応しい選択を行なうのである。「〔極端＝極端〕>中間」という図式にはこの認識のメカニズムが表れているのである。

3、自己に相応しい道の模索

モンテニユの認識と選択のメカニズムに従えば、凡庸な詩しか書けない者は詩作を諦めるがよい。適切な判断力を持たない者は単純に史実を記録する歴史家になるか歴史家の道を諦めるがよい。中途半端な能力の者は神学から手を引き単純な精神の者を見倣って素朴に信仰するがよい。だが、2で考察した「両極と中間」における、不幸を感じ、しかも統御できない中間の者が不幸に気づかぬ者になることは不可能だろう。中間の者が心の平安を得るには中間の者独自の道を模索しなければならない。そこでまずモンテニユは、不幸がそれ自体で不幸なのではなく、考え次第だと考えることによって不幸を蔑視しようとした（I, 14.）。不幸を蔑視しこれに動揺しない賢者を指向したのである。もっとも、必ずしも賢者を直接模倣するのではなく各人の気質と能力を考慮していたが¹⁰⁾、次の文章でモンテニユは、不幸に鈍感な者、不幸と対決できる精神の逞しさを備えた賢者、その中間の普通の魂をもつわれわれという三者を対比しながら、第三の「われわれ」が精神の平安を得る道として不幸を避けることを提案している。すなわち、事例⑫の「蒙昧bestise」のかわりにここでは「鈍感stupidité」という言葉が用いられているという用語の違いはあるものの、事例⑫と同じ「〔蒙昧＝賢明〕>普通」という図式において自己の位置を認識してそれを明確に表し、さらにそれに基づいて自己に相応しい道を選択しているのである。

Les ames qui, par *stupidité*, ne voyent les choses qu'à demy jouyssent de cet heur que les nuisibles les blessent moins : c'est une ladrerie spirituelle qui a quelque air de santé, et telle santé que la philosophie ne mesprise pas du tout. Mais pourtant ce n'est pas raison de la nommer sagesse, ce que nous faisons souvent. (...)

Mais les ames qui auront à voir les evenemens contraires et les injures de la fortune en leur *profondeur* et *aspreté*, qui auront à les poiser et goustier selon leur *aigreur naturelle* et leur *charge*, qu'elles employent leur art à se garder d'en enfiler les causes, et en destournent les advenues. (...)

Je sçay bien qu'aucuns *sages* ont pris autre voye, et n'ont pas craint de se harper et engager jusques au vif à plusieurs objects. Ces gens là s'asseurent de leur force, sous laquelle ils se mettent à couvert en toute sorte de succez enemis, faisant luicter les maux par la vigueur de la patience : (...) N'ataquons pas ces exemples (=sages) ; nous n'y arriverions point. Ils s'obstinent à voir resoluement et sans se troubler la ruyne de leur pays, qui possedoit et commandoit toute leur volonté. Pour *nos ames communes*, il y a trop d'effort et trop de rudesse à cela. Caton en abandonna la plus noble vie qui fut onques. A *nous airtes petis*, il faut fuyr l'orage de plus loing : il faut pourvoir au sentiment, non à la patience, et eschever aux coups que nous ne sçaurions parer. (III, 10, pp.1014-1015, b)

ここでは両極・中間という言葉は用いられていないが、この文章中の三項目は事例⑫と同様であるから、次のような「〔極端＝極端〕>中間」に図式化できよう。

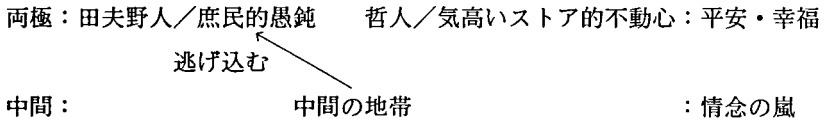
両極：不幸に鈍感な者 不幸と対決できる賢者：平安
中間： 不幸を感じる普通の者 : 苦痛——(不幸を避ける)→平安

次の文章は情念に関するものであるが、ここにも同じ図式を見出すことができる。モンテーニュは、ストア派の賢者の情念を抑える不動心に達することのできない者は、私のように情念の原因を避けて庶民の愚鈍に逃げ込もうと言う。

Les passions me sont autant aisées à éviter comme elles me sont difficiles à moderer. (...) Qui ne peut atteindre à *cette noble impassibilité Stoïque*, qu'il se sauve au giron de *cette mième stupidité populaire*. Ce que ceux-là faisoient par vertu, je me duits à la faire par complexion. *La moyenne region* loge les tempestes; *les deux extremes*, des *hommes philosophes* et des *hommes ruraux*, concurrent en tranquillité et en bon heur: (...) (III, 10, pp.1019-1020, b)

ここで特に注目に値するのは《*les deux extremes...concurrent en*》, 《*la moyenne region*》という、「つまらぬ器用さについて」における表現と類似する表現をモンテーニュが用いていることである。したがって明らかに、この文章を書いているモンテーニュにおいて「つまらぬ器用さについて」における「〔極端=極端〕≠中間」と同じ認識のメカニズムが機能していると言えよう。モンテーニュは、「〔蒙昧=賢明〕>中間」という図式において自己の置かれている状態を認識し、さらにそこから精神の平安を得る道を選択しているのである。だが、ここでは両極の一方、すなわち先に引用した文中の「不幸に鈍感な蒙昧」が「情念を避ける庶民的愚鈍」に置き換えられている点に注意したい。厳密に言えば、「情念に鈍感な蒙昧」、「情念を避ける庶民的愚鈍」、「ストア的不動心」、「情念と取えて対決し情念の嵐に巻き込まれる普通の魂」という四項目のはずである。したがって、モンテーニュが自己の状態を認識し、自己に相応しい方法を見出そうとする時、その時々に対比項目となる要素が

「〔極端＝極端〕>中間」という図式を形成するというメカニズムが働くと考えられる。上に引用した情念に関する文章は次のような図式に表すことができる。



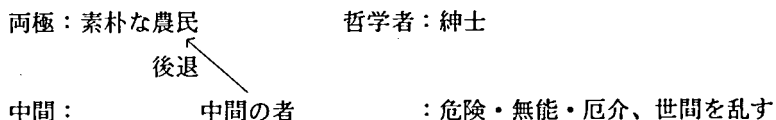
モンテーニュが精神の平安を乱す不幸としてもっとも強く意識し続けた死に関しても、モンテーニュは「中間の者」として自己に相応しい死の在り方を選ぼうとする。モンテーニュは、自殺を命じられて娼婦や仲間と遊蕩三枚に耽りながら自殺した者の例を挙げて、「この覚悟をもう少し真面目な形で見倣えないだろうか。愚者に相応しい死《mors bonnes aux fols》と賢者に相応しい死《bonnes aux sages》がある以上、彼らの中間の者に相応しい死を見つけよう《trouvons en qui soyent bonnes à ceux d'entre deux》」と言う（III, 9, p.984, b）。この言葉には、異なる個々の人間それぞれに相応しい死を認めるからこそ、自己に相応しい死の在り方を見つけようとする態度を読み取ることができる。

以上に考察した「〔極端＝極端〕>中間」におけるモンテーニュの認識と選択のメカニズムが簡潔に表れているのが、「つまらぬ器用さについて」における事例⑩である次の紳士に関する文章である。

⑩ *Les paisans simples sont honnestes gens, et honnestes gens les philosophes, ou, selon nostre temps, des natures fortes et claires, enrichies d'une large instruction de sciences utiles. Les mestis qui ont dedaigné le premier siege d'ignorance de lettres, et n'ont peu joindre l'autre (le cul entre deux selles, desquels je suis, et tant d'autres), sont dangereux, ineptes, importuns : ceux icy troublent le monde. Pourtant de ma part je me recule tant que je puis dans le premier et naturel*

siege, d' où je me suis pour neant essayé de partir. (I, 54, p.313, c)

この事例⑩は次のように図式化できる。



なまじ学問をかじったために無学な者を軽蔑し、さりとして真の哲学者の域には達しなかった中途半端な者（モンテーニュが第I巻第25章や同巻第26章などで批判している、学問が単なる知識に止まり自己の判断力の糧となっていない衒学者、「レーモン・スポン弁護」で批判している、自己の知力を過信して社会の現実には即さない革新を無分別に唱える博士（II, 12, p.559）など）の危険性・無能さ・弊害をモンテーニュは認識し、自己もその一人とみなして、素朴な農民の段階に立ち戻ろうとしている。信仰に関しても、不幸に関しても、モンテーニュは、人間の精神の無数の段階のうち、最も低い段階の者の単純素朴な態度と最も高い段階の者が達する境地という両極端を認識し、それらが対立する在り方でありながら、いずれも有益、賢明な在り方であるという一致を見出していた。逆に、両極の中間にある者には、弊害・危険を見出していた。それは特に、中途半端な能力の者が特別優れた者の真似をしようとする時に起こるものであった。モンテーニュは自己の遙か上と下の極端を認識し、それらと自己を対比することによって中間に位置する自己に相應しい在り方として単純素朴な者に見倣う。あるいはそれに近づこうとする。モンテーニュにおける▽型の「両極と中間の対立」には、そのような、両極の認識、一致、中間との対立、中間に属するという自己認識、達することの出来ない境地である一方の極ではなく、見倣うことのできる単純素朴というもう一方の極への後退（場合によっては不幸や情念に対するように中間の者独自の方法）の選択、というメカニズムが機能していると言えよう。 (この項続く)

注

1) 『エッセー』からの引用は *Les Essais de Michel de Montaigne*, édition conforme au texte de l'exemplaire de Bordeaux, par Pierre Villey et V.-L. Saulnier, 2 vol., 3^e éd., P. U. F., 1978. により、巻数（ローマ数字）、章番号（アラビア数字）、頁数の順で引用文末尾の括弧内に記した。なお (a) は1580年版および1582年版、(b) は1588年版、(c) は1588～1592年のテキストであることを示す。引用文中のイタリックは引用者。訳語は『エッセー』、原二郎訳、「岩波文庫」、岩波書店、1965-6.、『モンテーニュ』、荒木昭太郎訳、「世界の名著」、中央公論社、1979.、『モンテーニュ全集』、関根秀雄訳、白水社、1982-3. を参考にさせていただいた。

2) STAROBINSKI, Jean, *Montaigne en mouvement*, "Bibl. des idées", Gallimard, 1982, pp.159-168.

3) 荒木昭太郎、『モンテーニュ』、「人類の知的遺産」、講談社、1985, pp.77-93.

4) アリストテレス、『ニコマコス倫理学』、高田三郎訳、「岩波文庫」、岩波書店、1971, 上巻p.78, 1108 b28-34.

5) もっともこの引用は不正確であることをコスト氏が指摘しているが (VILLEY, *op.cit.*, p. 1262), ここではアリストテレスへの言及がこの章にあることが注目に値する。

6) MENUT, Albert Douglas, *Montaigne and the Nicomachean Ethics*, in *Modern Philology*, 31; 1933-1934, pp.225-42 によれば27回。

7) *«ces ordonnances logiciennes et Aristoteliques ne sont pas à propos.»* (II, 10, p. 414, a)

8) また、モンテーニュは「食人種について」の中で新大陸の話聞かせてくれた朴訥な男の証言の信憑性について語るところでも、とかく注釈をしたがり自己の解釈に説得力を持たせるために事実を歪曲・隠蔽・誇張せずにはいられない「利口な(小賢しい)人々」を批判し、真の証言をするのに適した条件はこのようなことをする才能や教養のない単純素朴さが非常に忠実であることだと言っている。(I, 31, p. 205, a)

9) THIBAUDET, Albert, *Montaigne*, Gallimard, 1963, pp. 505-566.

10) 不幸を蔑視するという目標に達成するために哲学の所説のうち各人の気質と能力に合ったものを選ぶことを提唱している次の一節を、モンテーニュの各人の気質と能力を考慮する態度を端的に表す文章の一つとして挙げておく。《Or sus, pourquoi de tant de discours, qui persuadent diversement les hommes de mespriser la mort, et de porter la douleur, n'en trouvons nous quelcun qui face pour nous? Et de tant d'especes d'imaginacions, qui l'ont persuadé à autruy, que chacun n'en applique il à soy une le plus selon humeur? S'il ne peut digerer la drogue forte et abstersive, pour desraciner le mal, au moins qu'il la preigne lenitive, pour le soulager.》(I, 14, p.67, a)

Considérations sur le mécanisme de la connaissance et du choix
chez Montaigne — correspondance entre les deux extrêmes et
opposition du milieu aux extrêmes — (1)

Mariko OKUMURA

Montaigne exprime souvent ses pensées en opposant le milieu et les deux extrêmes qui, eux, manifestent une analogie. Il le fait notamment dans l'essai «Des vaines subtilitez» où il énumère des «choses qui se tiennent par les deux bouts extrêmes» et ailleurs.

On peut distinguer quelques éléments importants qui constituent les unités fondamentales du mécanisme du jugement chez Montaigne dans ce schéma : (extrême=extrême)≠milieu. D'abord, la confrontation : celle de la supposition préalable avec le fait qui la contredit : bien que les extrêmes soient le plus éloignés l'un de l'autre (opposition), ils sont voisins d'un certain point de vue (correspondance). Ensuite, la distinction, «distingo» : connaissance des degrés, des mesures (les extrêmes et le milieu) et la sensibilité réflexe à «l'extrême».

Il est deux cas dans ce schéma : (extrême=extrême)≠milieu. Le premier est le cas où les extrêmes sont supérieurs au milieu : (extrême=extrême) > milieu. Le deuxième est le cas où ils sont inférieurs au milieu : (extrême=extrême) < milieu. Traitons d'abord du premier.

Montaigne n'accorde pas seulement son estime à l'esprit supérieur, le plus élevé parmi les milliers de degrés où se répartissent les esprits humains, mais aussi au plus simple, au plus bas, qu'il estime comparable au premier. A l'inverse de ceux qui mesurent à leur toise, il distingue et reconnaît ces

deux extrêmes, à une grande distance au-dessus et au-dessous de lui. L'esprit intermédiaire, il le considère comme médiocre, nuisible, dangereux, malheureux, ou importun. Quant à lui-même, comme il se trouve sur un degré moyen de l'échelle, il ne tend pas à s'élever au plus haut qu'il considère comme impossible à atteindre, mais il descend au degré le plus inférieur, à la simplicité. En ce qui concerne la poésie, exceptionnellement, il y renonce car il ne sait composer que des poèmes médiocres. En ce qui concerne l'histoire, il ne juge pas de la vraisemblance des événements qu'il connaît par ouï-dire ou par la lecture, et les rapporte très fidèlement à la manière des 《historiens simples》; en religion, il croit sans interpréter ni la Bible ni le dogme tout comme les esprits simples moins curieux et moins cultivés; il fuit le malheur d'avance car il est incapable de devenir aussi insensible que les 《âmes stupides》; il imite les paysans simples pour être 《honnête》.

On peut donc voir dans le premier cas, celui de la correspondance des deux extrêmes opposés au milieu, fonctionner chez Montaigne un mécanisme de la connaissance de soi qui est moyen ou médiocre et un mécanisme du choix qui se porte dans la plupart des cas sur l'extrême le plus bas.

(A suivre.)